

「陣ノ内城跡」が

本町初の国史跡へ

■「麻生原のキンモクセイ」以来
87年ぶりの国文化財が誕生

6月18日（金）、国の文化審議会は、本町豊内の台地の上に位置する「陣ノ内城跡」を国指定文化財「史跡」に指定するように文部科学大臣に答申しました。今後、官報での告示を経て、正式に本町で初めての国史跡が誕生する予定です。

国指定の文化財として指定されれば、天然記念物「麻生原のキンモクセイ」（昭和9年指定）以来87年ぶり2件目となる「陣ノ内城跡」。これまでの発掘調査や関連史料調査を経て、報告書をまとめた町教育委員会の取り組みを追いしました。

■肥後国内の中世城館で突出した
規模と良好な保存状態

「陣ノ内城跡」は、緑川と流域の平野を見下ろす標高約100mの高台の上にあります。堀とその内側に沿った土塁が明瞭に残り、その中心部の規模は発掘調査で確認されたものを含めると、東西210m以上、南北190m以上になります。北西と南東の2力所に城内への入口（虎口）をもつ方形の城跡であることが明らかになりました。

この城は、江戸時代中期頃から阿蘇神社（阿蘇市）の神主で阿蘇



1_北東側からみた陣ノ内城跡の全景 2_城跡の北と東を囲む幅16~20㍍、深さ約5㍍の空堀
3_中心部には東西145㍍、南北132㍍の平坦部とそれを囲む土塁が現存 4_周囲を囲む堀や土塁を含めると中心部の規模は南北190㍍以上、東西210㍍以上におよぶ



答申内容は町公式ウェブサイトでもご覧いただけます



緑川が育んだ甲佐の歴史の1ページ。
そこに記された時代の変化の記録は、
今へと続く私たちのまちの物語です。

地域や上・下益城地域を支配した豪族でもある阿蘇大宮司の館跡と伝えられていました。しかし、①肥後国内で突出した規模を持つこと、②大規模な堀と土塁で構成される城の構造は豊臣系大名の城に共通することから、天正16年(1588年)に入国した小西行長が、阿蘇氏の拠点が置かれた場所に築城したとする見方が示されています。

肥後国における城館の中でも突出した規模を持つ保存状態が良好な城跡です。城跡のある場所は山間部から平野部へと続く水陸交通の要衝であり、文献史料と出土遺物などから長期間にわたって継続的に利用されたと考えられます。阿蘇氏から豊臣系大名による肥後国支配へと転換する時期の政治的社会的状況を考える上でも重要であることが高く評価され、今回の答申となりました。

■国指定文化財とは

国指定文化財には、建築物や美術工芸品を対象とした「有形文化財」(特に重要なものは「重要文化財」や「国宝」に指定)や名勝地(庭園や溪谷など)を対象とした「名勝」、動植物を対象とした「天然記念物」などがあります。「陣ノ内城跡」は古墳や城跡などを対象とした「史跡」として国文化財の指定を受ける見込みです。

陣ノ内城跡のこれまで



空堀や土塁が耕作地として広く活用されていた調査前の陣ノ内城跡（平成14年ごろ）



平成14～16年度 測量調査と試掘調査

■陣ノ内城跡の謎に迫る

町教育委員会では、甲佐町文化財保護委員と協力しながら文化財の保護や調査に取り組んでいます。国史跡となる「陣ノ内城跡」のこれまでを振り返ります。

陣ノ内城跡は、江戸時代に書かれた『肥後国誌』や「古城考」などの文献資料において中世期の阿蘇大宮司の館跡とされた史跡です。昭和55年に町文化財「陣ノ内館跡」として町が指定し、その保護や活用を行ってきました。

しかし、築造時期などの謎も多いことから、町が平成14年度から平成16年度にかけて、遺跡の良好な保存と活用を目的とした調査を実施。

①周囲を覆っていた低木などの伐採（写真2）

②空堀と土塁、平坦部を中心とした詳細な地形測量



地域に眠る宝の調査に尽力

元町文化財保護委員

清村一男 さん（下豊内区）

乙女小校長を平成9年に定年退職後、町文化財保護委員などを歴任。調査への参加だけでなく、下豊内区長として住民理解を得るために奔走するなど国史跡指定への礎を築く。平成21年甲佐町功労者表彰。

③平坦部中心部の試掘（写真3）
について地権者の同意を得ながら段階的に取り組みました。

■大規模造成の痕跡が出土
現地に残る堀や土塁、平坦部の詳細な測量調査により、城跡の謎を明らかにする準備が整いました。「畑から石が出た」という地権者の声を頼りに行った発掘調査では、直角に配置された幅約1メートル、長さ約57メートルにおよぶ石列が出土（写真4）なんらかの大規模造成が行われた形跡が明らかになりました。

しかし、県内の城跡の調査・研究が進むにつれ、現地に残された大規模な土塁や堀の構造から、現存する遺構を中世にこの地を治めた豪族（阿蘇大宮司）の館跡とする定説が疑問視されるようになり、遺跡の範囲や築造時期などの解明が待たれました。



当時の調査を担当

町企画政策係長

西口貴志 さん(北早川区)

平成16年入庁。当時配属された町社会教育課で陣ノ内城跡の発掘調査などに取り組む。埋没した堀の発見や出土遺物の分析から、城跡が豊臣系大名のものである可能性を提示し、国史跡指定に大きく貢献。

■発掘調査で埋没堀を発見
平成14年春に5日ほどかけて行われた試掘調査では、築造時代の判明に直接結びつく遺物が出土せず、その解明には至りませんでした。そこで、平成20年度から5力年をかけて実施した調査では、地形測量や発掘調査に加えて、地中レーダー探査、聞き取り調査、文献調査、縄張り調査などを行いました。

調査は、熊本大学等の多くの教育機関や研究団体、学識経験者の協力により多角的に行われ、南側と西側に埋没した大規模な堀などを発見。城の入口（虎口）の推察につながる痕跡も見つかり、陣ノ内城跡が方形区画の土塁と堀を備えた城跡であったことが明らかになりました。

また、地域住民への聞き取り調査などを通して、城の構造や豊内地域の城下町の様子が、登城ルートの復元につながりました。

■出土した輸入陶磁器が示す築造者の姿
南側および西側に登城道と入口（虎口）を持ち、四方に堀と土塁を備えた大規模な城跡であった陣ノ内城。その築造に関わった人物の手掛かりは、出土遺物に見ることができま。

遺物には、12〜14世紀および16〜17世紀の中国・朝鮮からの輸入陶磁器があり、阿蘇大宮司の活躍する中世から小西行長・加藤清正の活躍する近世初期まで幅広い時代で、有力者がこの台地を使っていたことを示しています。また、県内の他の城跡との比較検討により、陣ノ内城跡が豊臣系大名の小西行長の城跡とする考えが強まりました。

平成20～25年度 発掘調査と出土遺物分析



5_ 城郭中心部で出土した石列遺構。掘った溝の中に配置された石は、建物を囲む堀や柵などの基礎石とみられる。



6_ 土塁から出土した石敷遺構。構造物を建てるための基礎石とみられる。

7_ 16～17世紀に中国で作られた景德鎮窯系および漳州窯系の輸入陶磁器。阿蘇氏や小西行長。加藤清正の時期のもので、交易ルートを持つ有力者が陣ノ内城に関わっていたことを示す。



8_ 南西側の発掘調査で発見された埋没堀。写真左の明褐色土部分が堀の原形とみられる。その上層に堆積した褐色土の堆積状況と出土遺物から、19世紀以降に写真右側にあった土塁を崩しながら人為的に埋め戻されたことが明らかとなった。



陣ノ内城跡のこれから

■未完の城に遺された時代の転換期の記録

平成14年から令和2年にかけて行われた調査などから示された「陣ノ内城跡」の歴史的価値として、

①小西行長の城郭の遺構を良好に残すこと

②豊臣系大名が新たな領国を宛てがわれた際の統治モデルの1つを示していること

③長期間にわたって統治権力やそれに準じる権力者に利用されてきたことを挙げています。

これまでの調査で建物の痕跡が見つかっていないことなどから、関ヶ原の戦いで滅亡した小西氏の後、使用・改修されなかった未完成の城である可能性が考えられます。当時の築城過程を知ることがで

きる貴重な城跡としての歴史的価値が見出されました。

陣ノ内城跡に関する調査・考察を取りまとめた報告書は、町生涯学習センター・図書室にて閲覧可能です。

■築城から治水へ

天正16年（1588年）から慶長5年（1600年）にかけて甲佐を統治した小西氏に変わって肥後一国を治めた加藤清正は、薩摩街道や日向往還、豊前街道、豊後街道の4街道沿いに支城を整備します。一方で、甲佐の統治は慶長5年（1600年）から32年間続き、その間に緑川の治水事業を推し進めたのは、皆さんがご存じのとおりです。慶長13年（1608年）に完成したと伝わる「鵜ノ瀬堰」をはじめとした清正による緑

川の治水事業の数々は、甲佐地域の発展に大きな功績を残しています。

■新たな宝を次の世代へ

町教育委員会では、昭和55年に町指定文化財「陣ノ内館跡」として登録して以来、その調査・保護と利活用を進めてきました。その過程で「陣ノ内城跡」への名称変更を行っています。

清村一男さんをはじめする地域の協力も得ながら具体的な調査をはじめて19年。歴代担当者や発掘調査などに携わった皆さんの思いを引き継ぎ、国史跡指定への道筋がつけられました。

今後、研究機関や地域住民などと連携しながら、保存・活用に向けた計画づくりがはじまります。この計画に基づき、陣ノ内城跡の整備が進められる見込みです。

清村さんらが種をまき、歴代担当者が大切に育ててきた甲佐の新たな宝がようやく花を咲かせようとしています。この宝を皆さんと共に守り、次の世代へ引き継いで行かなければと考えています。



▲報道陣に陣ノ内城跡の活用について話す奥名町長

■本町の新たな魅力をまちの元気につなげる

町では、6月18日（金）に行われた国の文化審議会による答申に関して記者発表を行いました。

奥名町長は、地元新聞社をはじめとする報道陣を前に、県内の国指定史跡として43件目となる国史跡「陣ノ内城跡」の誕生が見込まれることを報告。「コロナ禍の中で町民に明るい話題を届けることができ、うれしく思う。今後、甲佐神社や鵜ノ瀬堰、やな場などの歴史的資産とあわせて本町の魅力を発信しながら、

町の元気につなげていきたいと思っています」とあいさつしました。

■緑川流域の地域資源を活用してにぎわいを創出

町では、平成30年7月に「甲佐町における歴史的資源を活用した地域活性化及び地方創生推進に関する連携協定」をまちづくり団体などの6者と締結し、関係人口の拡大に取り組んでいます。

今後、国指定史跡となる「陣ノ内城跡」をはじめとした緑川流域に点在する歴史や自然といった地域資源を活用しながら、本町の地域活性化を推し進めていきます。



▲締結式で手を取り合う6者の代表者ら（平成30年7月）



過去の調査成果を総括

町教育委員会 学芸員
上高原 聡 さん（熊本市）

平成30年入庁。学芸員としての知識や経験を活かし、町文化財の調査や保護、活用に取り組む。過去の調査を整理・分析し、その重要性を総括報告書としてまとめ、陣ノ内城跡の歴史的価値を高めた。

緑川が育む豊かな歴史

私たちのまちを流れる緑川は、古来から田畑だけでなく甲佐の暮らしも潤してきました。この水の恵みは今も変わらず私たちの日常に溶け込んでおり、甲佐の歴史を彩るかけがえのない存在となっています。この夏、緑川と共に歩んできたこのまちの物語について、ご家族で楽しんでみてはいかがでしょうか。



▲かつて甲佐を流れたと伝わる2本の川（緑川環境教育啓発資料集）

■甲佐を流れていたとされる2本の川と陣ノ内城
清村一男さんや西口貴志さんがその編纂に関わった『新甲佐町史』には、緑川の章があり、以前の緑川の姿について垣間見ることが出来ます。現在の緑川は、甲佐神社付近で山間部から流れ出て、中甲橋付近で美里町を流れる津留川と合流し、町中心部西側を乙女台地に沿って流れています。昔話では、甲佐神社と中甲橋との間にあった「赤岩」と呼ばれる岩山に遮られた緑川が、陣ノ内城跡の麓に沿って竜野地区へと流れていたと伝えられています。現在

の町中心部は、当時、緑川と津留川に挟まれていたのかもしれない。

『新甲佐町史』では、この2本の川の真相に迫り、土地の標高差からみる地形的な特徴や古地図などの文献資料から復元を試みています。その結果、現在の町役場付近を川が流れていた可能性が高まりました。

もしかすると陣ノ内に足を運んだ小西行長は、2本の川が流れる甲佐のまちを眺めながら、この地の統治に思いを巡らせたのかもしれない。

■清正公の治水工事

関ヶ原の戦い後、小西行長に代わって領国支配を行なった加藤清正は、領民の安定した暮らしのため、緑川の治水事業に取り組みました。2つの川に挟まれ、洪水が絶えなかった甲佐には、水害から人々の生活を守るために流れの早い瀬に堰を造った「鵜の瀬」や緑川の流路を変えて津留川と合流させるための土木工事を描いた「赤岩のはなし」といった治水工事の伝承が残されています。これらの甲佐に残る昔話は、『甲佐のむかしはなし』第一集・第二集（町教育委員会発行）に

『加藤清正傳』（中野嘉太郎著 青潮社 昭和54年）



▲甲佐に残された清正の治水の伝承を収録した「甲佐のむかしはなし」

まとめられています。

こうした治水工事により荒れた田畑は潤いました。清正も治水の名人として信仰の対象となり、「せいしよこさん」として岩鼻神社（横田区）にまつられています。

▼掲載書物

『新甲佐町史』（町教育委員会発行）

『心のふるさと 緑川（緑川環境教育啓発資料集）』（町教育委員会発行）

『甲佐のむかしはなし』第一集・第二集（町教育委員会発行）

『加藤清正傳』（中野嘉太郎著 青潮社 昭和54年）



▲人と物を運んだ緑川の流れ。中央は鵜ノ瀬堰。

■歴史の道百選「緑川水運」
古くから人や物などの交流の舞台となってきた緑川は、甲佐の文化や歴史を理解する上で極めて重要な意味を持っています。「歴史の道百選」は、これらの歴史的・文化的に重要な由緒を持つ古道や交通関係遺跡を文化庁が選定し、その保存と活用を広く呼び掛けるものです。全国各地から選定された114件の歴史の道には「豊後街道」や「日向往還」などと共に「緑川水運」が含まれています。「緑川水運」（山都町・美里町・甲佐町・熊本市・宇土市）は、緑川上流の津留ヶ淵（山都町）から下流の熊本藩川尻米蔵跡・大渡津（熊本市）までの緑川を利用した物資の輸送の歴史を物語っています。